

◎食のリスクコミュニケーション・フォーラム 2018 (4回シリーズ)  
『消費者市民のリスクリテラシー向上につながるリスクミとは』  
第2回テーマ：『残留農薬のリスクミのあり方』

【開催日】 2018年6月24日(日) 13:00~17:50 <懇親会>18:00~19:30

【開催場所】 東京大学農学部フードサイエンス棟 中島董一郎記念ホール

<http://www.a.u-tokyo.ac.jp/campus/overview.html>

【主催】 NPO 法人食の安全と安心を科学する会 (SFSS)

【後援団体】 消費者庁、東京大学大学院農学生命科学研究科附属食の安全研究センター、一般社団法人食品品質プロフェッショナルズ

【対象】 食品関連行政の担当者、食品事業者の広報・お客様相談・品質保証担当、リスク研究者、マスメディア、消費者団体・市民団体、など

【定員】 先着 50 名

【講演会参加費】 3,000 円/回 (当日会場にて現金で申し受けます)

\*SFSS 会員、後援団体 (団体あたり先着 5 名まで)、メディア関係者 (取材の場合) は無料

\*18 時からの懇親会は別途 2,000 円/回 (当日会場にて現金で申し受けます)

【参加申込み】 [http://www.nposfss.com/form\\_riscom2018.html](http://www.nposfss.com/form_riscom2018.html) (6月21日で受付終了)

【お問い合わせ】 SFSS 事務局まで (TEL/FAX: 03-6886-4894、email : [nposfss@gmail.com](mailto:nposfss@gmail.com))

【本フォーラムの主旨】

毎回、食のリスクに詳しい有識者をお迎えし、講師 3 名 (Q&A 含み 60 分) + 総合討論 (90 分) : 13:00~17:50 (休憩 20 分) の構成とします。総合討論では、市民の食の安全・安心につながるリスクミとはという大命題について、会場からの質問に講師が回答する形で議論します。

【各講師のご紹介&講演要旨】

① 畝山 智香子 (国立医薬品食品衛生研究所)

『リスクアナリシスで考える残留農薬』

食品はもともと無条件に安全なものではなく、食品の安全性はリスクアナリシスにより確保されるがこのことが広く国民に浸透しているとは言い難い。また食品安全以前に十分な量の食品を確保すること (食糧安全保証) が必要である。農薬については食品添加物と並んで消費者が食品中に存在して欲しくないと認識しているものの代表例である。リスクアナリシスで考える残留農薬の安全性と、消費者が認識している安全性とのギャップについて検討してみたい。

② 富岡 伸一 (サントリーマーケティング&コマース (株))

『食品企業の品質保証とリスクミ ～ウーロン茶葉の残留農薬品質保証を事例として～』

社内若手へのヒアリングで約30%が「リスク＝危険」と応えた。そして「リスクがある、あるいは、リスクがない」という会話が交わされている。このように食品企業の社内リスクミも必要なのが現状であり、お客様へのリスクミはさらに重要なものと考えている。「農薬」「食品添加物」「遺伝子組換え食品」などが多くのお客様に不安を与えるという社内認識に基づき2007年末のギョーザ事件以前は、たとえ安全性を説明しようとしても「農薬」という言葉はHPなどで使用不可であった。

サントリーは2006年の残留農薬ポジティブリスト化対応として中国産ウーロン茶葉の残留農薬分析センターを設立。日本向け茶葉の全ロット分析によるお客様へのアカウントビリティ体制を整えたが、社外訴求ができたのは2008年からである。幸いにも2012年の30社以上100製品以上に及んだウーロン茶葉・製品の大回収での影響は無かった。この結果を導いたのはリスク認識・リスク低減活動である。日本向け茶葉分析のみならず中国国内の茶葉の分析や茶葉生産者（農家・加工者）の調査・指導など地道なリスク低減の取り組みを紹介する。

③ 青山 博昭 (一般財団法人残留農薬研究所 業務執行理事・毒性部長)

『毒性評価の現場からリスク・コミュニケーションを考える』

実験動物を用いて農薬の毒性評価に取り組んでいる私たちには、少なからぬ数の市民が様々な農産物の安全性に漠然とした不安を抱いているとの指摘を受けたり、無農薬栽培された野菜が生産コストを度外視して称賛されているとの情報に接したりするたびに、何故そのようなことになるのかとの疑問が湧く。その理由は未だ私たちにも分からないが、メディアや市民に対して私たち専門家が毒性評価の実態を十分に説明できていないことも一因かもしれない。今回のセミナーでは、農薬の毒性評価やその結果に基づくリスク評価の実情を可能な限り平易な言葉で説明して、農薬の安全性に関する市民の疑念が少しでも晴れるよう努めたい。

以 上